

書評と紹介

野村達朗著

『アメリカ労働民衆の歴史』

——働く人びとの物語——』

評者：篠田 徹

トランス・パシフィック・サンディカリストが書いたもう一つのアメリカ労働運動史

空前絶後の本である。帯には「「労働」の観点から描く、多様な民衆の物語 白人、黒人、女性、工場労働者……働く民衆が紡いできた壮大な歴史の歩み」とある。20世紀にこの国に生まれ育った者が書いた働く者の運動史で、少なくともその意図の意義に於いて十指に数えられよう。確かにアメリカの話だ。だが第二次大戦以前から日本に生き、アメリカの働く者の運命をここに描く如く大事に想う事の意義を考えれば、読後に去来する史的想像は尽きない。

著者は、これまで『フロンティアと摩天楼』『「民族」で読むアメリカ』『ユダヤ移民のニューヨーク』『大陸国家アメリカの展開』『アメリカ合衆国の歴史』等の編著者で知られ、この四半世紀余の日本のアメリカ史研究を社会史の方面、特にユダヤ人を中心とした都市部の移民エスニック・コミュニティのそれに於いて強力に牽引して来た。だが研究者としての出発点に於いてアメリカ労働史を選択し、卒論は世界産業労働者同盟 (IWW)、留学先はその研究の第一

人者メルヴィン・デュボフスキー、翻訳は京都でその薫陶に触れたハーバード・ガットマンの論文集とE.P.トムソンらの聞き取り集、更にサンディカリズム史の泰斗デイヴィッド・モントゴメリーとの知己と、世界を席捲した新労働史の最先端でその息を吸い、その極東の担い手として魁と深く語らう知的青春を過ごしたその延長上で、上記の様な社会史的研究を経た著者の研究遍歴を考えれば、本書の発刊は正に「本命」来たるの感がある。先ずは中身を見よう。以下は本書の目次である。

序章 労働民衆史の魅力

- (1) 労働民衆史とは何か
- (2) 本書で扱う範囲

第I部 一九世紀の労働民衆

第1章 前工業的時代としての出発—植民地時代から共和国初期

- 1 「自由な植民地」として出発したアメリカ
- 2 都市で働く人々の世界

第2章 工業化過程の中の労働民衆—一八五〇年代まで

- 1 急激な経済成長と労働者階級の形成
- 2 労働運動の始まりと展開
- 3 工業化過程の中の労働者の生活と文化
- 4 移民の流入と民族対立
- 5 家庭の外に働きに出た女性労働者と農業労働者

第3章 黒人奴隷制と労働民衆

第4章 金ピカ時代の労働民衆—一九世紀後期

第5章 巨大企業の社会へ—一八九〇年代

第6章 多様な労働民衆—一九世紀後期～二〇世紀初頭

第II部 二〇・二一世紀の労働民衆

第7章 革新主義時代の労働者—一九〇〇～一九一〇年代

- 1 二〇世紀初頭の社会と労働運動
- 2 階級的対立の激化
- 3 第一次大戦とその直後の時期

第8章 繁栄と保守の中で一どよめく一九二〇年代

- 1 絶頂に達した産業資本主義の下で
- 2 移民制限, 黒人労働者階級の形成, 女性労働者

第9章 大不況下の苦しみと闘い—一九三〇年代

- 1 大不況の到来と労働民衆の苦しみ
- 2 第一期ニューディールと労働民衆
- 3 第二期ニューディールとローズヴェルト連合の形成
- 4 盛り上がったCIOと座り込みストライキ
- 5 共産党と社会党
- 6 多様な労働者—エスニック・黒人・女性
- 7 大不況期の日常生活

第10章 第二次大戦とその直後—一九四〇年代

- 1 第二次大戦と労働運動
- 2 第二次大戦直後の労働問題と反共の動き

第11章 「ビッグ・レイバー」の時代—一九五〇年代

- 1 AFLとCIOの合同, 巨大労組の制度
- 2 「豊かな社会」(?)の労働者
- 3 動き始めた黒人労働者

第12章 アメリカが揺れた激動の中での労働者—一九六〇年代

- 1 旺盛だった労働組合運動
- 2 ベトナム戦争の時代
- 3 黒人労働者の運動
- 4 「ミドル・アメリカ」(白人下層中産階級)と黒人の関係
- 5 フェミニズムの台頭と女性労働者

第13章 忍び寄る保守化と移民の流入—一九七〇年代

- 1 労働運動と一九七二年の大統領選挙
- 2 グレート・U・ターンの始まりと経済的危機の到来
- 3 グローバル化の中で生じた新しい移民の大流入

第14章 レーガン・ブッシュ期の労働民衆—一九八〇年代

- 1 ロナルド・レーガン政権の反労働政策
- 2 「コンセッション」の嵐の中で低迷する労働運動
- 3 企業とリストラ, 生産立地の移動
- 4 著しい格差社会へ
- 5 ジョージ・ブッシュ政権の時代とリセッション

第15章 労働運動に起こった革新の動き—一九九〇年代

- 1 若き大統領クリントンと労働民衆
- 2 スウィーニーAFL-CIO新会長の登場

第16章 ほのかな希望の光—二一世紀に入って

- 1 ジョージ・W・ブッシュの時代と労働運動の大分裂
- 2 オバマ大統領の下での労働民衆

この他に文中コラムとして13の各期の論題に関連した興味深い労働逸話が挟まる。

実は文中は更に各節毎幾つか小見出しを持つ。文章は至って平易で、筆者の分析は簡明に止め、極力事実に語らせる。360頁を超える重厚な本だが、たとえ筆者のアメリカ史、とりわけその社会史への博識を知らなくても、すんでのところに加筆が止められたのがありありと分かる行間語間から、膨大な量の情報が削られたに違いない事が伺える。3,500円の定価に出版社の期待が滲み出る。確かにこの本は良い教科書でもある。だが誰に教えるか。勿論先ずは高校生、大学生だ。但しそれは企業も聖域ではない民主主義社会で働く事になる若者への準備教育としてだ。また働く老若男女だ。それはこの国の民主主義を持続可能にするための社会教育だ。これは筆者の願望でもあろう。

そう思うのには一つの推測が前提にある。筆者の頭に、1989年にニューヨークのパンテオン社から初版が出たアメリカ史の異色のテキスト『誰がアメリカを作ったか (Who Built America? Working People and a Nation's Economy, Politics, Culture and Society)』がなかったか。上下巻1,300頁を越え、新版にはビジュアルやサウンド資料がふんだんに盛り込まれたメディア学習用のDVD迄付いている。媒体は違えど先のコラムもこれら参考学習を意識していないか。そもそも両書は書名にworking people (労働民衆は訳語)を謳う。テーベの塔や万里の長城と言った歴史の書物に登場する偉大な建造物の作り手は、どうして指図だけした王様や権力

者ばかりなのか、何故、もっこを担ぎねこを押した労働者は登場しないのかというブレヒトの詩になぞらえたタイトルを冠したこのテキストは、本書筆者の僚友で、アメリカの新労働史のみならず社会史研究を強力に推進しながら、余りにも早くこの世を去ったハーバード・ガットマンが、彼の社会史講座を受講し、それ迄歴史の中で忘れられた自己の存在を見出し大いに鼓舞された労働運動関係者らにこういうテキストが欲しいと求められ、まるでその運命を予見した様に晩年心血を注いだニューヨーク市立大学のアメリカ社会史プロジェクトの成果だ。それは80年代からハワード・ジンの『合衆国人民の歴史』を始め陸続と出版されるアメリカの民衆史本と共に、それまでの強者の歴史に埋もれた名も無き労働民衆をアメリカの政治経済、社会文化を作った主人公にして歴史を読む作風を広めた。因みに以下が『誰が…』の目次である。

第一巻 占領・植民地化から再建期を経て1877年の大騒擾まで

第一部 植民地化と革命, 1607—1790

- 1 ヨーロッパがアメリカを植民地にする：三つの世界の遭遇
- 2 奴隷と南部植民地の成長
- 3 自由労働と北部植民地の成長
- 4 「革命の偉大さ」

第二部 自由労働と奴隷, 1790—1860

- 5 奴隷南部の成長
- 6 自由労働北部
- 7 社会生活の変容
- 8 北部における自由労働のための闘い
- 9 奴隷労働を巡る闘争

第三部 戦争、再建、労働, 1860—1877

- 10 南北戦争：アメリカの第二革命
- 11 奴隷解放と再建
- 12 戦後の産業労働

第二巻

第一部 独占と騒擾：1877—1914

- 1 進歩と貧困：産業資本主義の成長

2 労働者の階級的集合行為の登場

3 大騒擾：1880年代と1890年代

4 労働民衆と改革

第二部 戦争、恐慌、産業別組合：1914—1945

5 民主主義のための戦争

6 「新しい時代」：大衆社会とビジネス天下

7 大恐慌と第一次ニューディール

8 労働がアメリカを民主化する

9 国の変容：第二次大戦とその後

第三部 「アメリカの世紀」の盛衰：1945—1991

10 戦後時代

11 権利意識高揚の1960年代

12 合衆国とグローバル経済

両書の目次を並べると、始まりの違いを除けば、第二次大戦が終わる迄は、文言は異なっても物語のあらましと注目点に相当の共鳴が見られる。『アメリカ…』の筆者の指摘通り、19世紀は新労働史の豊穡な成果が証され、20世紀前半は政治学で云う第二次大戦後の「戦後労資和解体制」迄の序曲として政治史的観点が押し出される。確かに社会史好きには「面白」くないかもしれないが、アメリカ労働運動の英雄譚に親しんだ者は、慣れても佳境は矢張り心躍る。興味深いのは第二次大戦後だ。『アメリカ…』より20年程早いとは言え、執筆時には40年以上経過した『誰が…』の第二次大戦後へのそっけなさが目立つ。労働、社会の現代史が尚熟せずという事はある。ニューディール期が佳境となり、それ以後は良く言えば成熟、さもなくば墮落視される事もままあるアメリカの戦後労働運動に対する評価もあるやもしれぬ。執筆時の運動低迷を思い起せばむべなるかなでもあるが。

これに対して『アメリカ…』の方は、10年毎に刻みつつ労働運動の行方を熟視する。確かに『誰が…』同様この時期を労働史社会史で物語るのは時期尚早だ。だがアメリカの政治経済体制の行方に労働民衆の動向が深く関与する舞台としての戦後労働運動の軌跡を、その帰趨に

左右されながらこの国に生きた者がどうして軽視出来るかという筆者の態度には首肯する。此処に先ず日米を問わずアメリカ史としての本書の独創性が屹立する。更にグッと来るのが筆者が序章で引くエリック・フォーナーの「アメリカの進歩的な社会変革は強力な労働運動がなければ実現できない」の言辞だ。叔父のマルキストで労働運動史の泰斗フィリップ・フォーナーではなく、W.E.B.デュボイス以来黒人の主体性に注目し再建期の再評価を牽引したエリックのそれだ。だから第二再建期とも呼ばれる第二次大戦後から60年代末迄のアメリカの熱い季節を、白人、女性、移民の各労働者群に目配せしつつ、黒人労働者が鍵を握った労働運動の物語として描く。

従来この物語は公民権運動やブラック・パワーのそれとして、或いは大戦後の波状ゼネストや南部組織化が頓挫しその後体制化する労組のそれとの抱き合わせが相場だった。だが20世紀末に出たケビン・ボイルの『全米自動車労組とアメリカ・リベラリズムの全盛期 (The UAW and the Heyday of American Liberalism, 1945-1968)』頃から、第一再建期を含めアメリカ政治史研究の階級的人種交叉連合への関心が高まる。このデュボイス仕込みの視点を踏まえ筆者は更に、公民権運動等の背後にある黒人労働者の動向とその組織的行動を用意する労組経験を、別件に見えるこの時期の政治経済状況を綴った幾つもの小小見出しにまぶしつつそれらを貫く黒い糸を潜ませ、何かあると訝り頁を繰る往復の末漸くそれに気付いた11、12章の読者を唸らせる。

それにしてもこの労働運動へのこだわりは何処から来るのだろう。普通新労働史や社会史に頭から入ると違和感を覚えるかもしらん。だが『誰が…』の若きガットマンが労働運動が日常化した自身のニューヨークのユダヤ人コミュニティの空気を吸った様に、同世代の『アメリカ

…』の筆者も朝鮮戦争の最前線を目前に米軍基地と平和運動のメッカ福岡で、それこそ労働運動が最も日常化した50年代前半を送った。本文最後の「海の彼方のアメリカの労働民衆に」「日本の労働民衆の一人として」「心を寄せた」「同時代史」の原風景が此処にないか。

恐らく最初はアメリカは紛うかたなき他者であったろう。だがドイツ史専攻の研究室に2冊だけあった世界産業労働者同盟の本が筆者のアメリカ観を変えた。キューバ出身のパン・アメリカニスト、ホセ・マルティが言う「われらのアメリカ」を見出した瞬間だ。それも当時漏れ聞こえだしたスターリン批判がもたらした知的渴望を癒さんがため、オルタナティブな対抗理念を非共産圏の、それもピカピカの資本主義国の歴史の真っ只中に求めたのは、遠く海を隔てたトムソンとガットマンも同じだった。つまり筆者が新労働史に向ったのは、同じ道を辿った者に付いてよく言われる既存の労働組合史に感じた飽き足らなさや云うよりも、時代が信じさせたもう一つの労働運動への希求であったろう。

労働民衆が歴史を切り開く自らの力を信じ、その事を自身で学ぶ教育活動に熱心に取り組んだ歴史的集団をサンディカリストと呼ぶならば、筆者は、またこの書評冒頭に掲げた筆者の僚友も、立派なサンディカリストであろう。もっとも後者はその研究歴や研究対象、そして実際の運動空間に於いてトランス・アトランティック・サンディカリスト達であった。これに対して本書は、前者に比べ遙かに「想像の共同体」の色合いが濃いトランス・パシフィック・サンディカリスト達の一人が書いたもう一つのアメリカ労働運動史である。

ここで書評にお決まりな「おねだり」を書き連ねるなら、このアメリカのもう一つの労働運動史も更に一層トランス・パシフィックにして欲しかった。歴史記述の日米関係史はアメリカ史の日本史への輸出超過だ。アメリカ史には一

般に経済を含めて戦争以外日本は登場しない。だがロン・タカキの著作が示す様にアメリカの労働民衆史にとって日本を含むアジア諸国からの移民史は不可欠だ。だから今や労働運動史にとって欠かせないデイヴィッド・ローディガーの「ホワイトネス」論を出すなら、そのトランス・パシフィックな嚆矢であるアレクサンダー・ザクストンの『不可欠な敵 (*The Indispensable Enemy*)』と共にユージ・イチオカの一連の日系アメリカ人の労働民衆史も入れて欲しかった。尤も在米日本人社会主義者の話を出した筆者がそれを試みなかった訳はなからう。泣く泣くはしょった筆者の「貴方がおやんなさい」の声が聞える。

では日本国内の話は如何しよう。例えば日米労働民衆は労働文化も共有した。本書のコラム6「ベストセラーとなった『進歩と貧困』と『顧みれば』」は翻訳を通じて殆ど同年代に日本でもそうだった。勿論アメリカの読者はそれを知らない。同じく11『ダスト・ボウルとウディ・ガスリー、フォークソングの誕生』のピート・シーガーは、赤狩りで不遇の頃日本のうたごえ運動の『原爆を許すまじ』で奮い立った。彼の『We Shall Overcome』を熱唱した戦争を知らない子供達はそのことを知っているだろうか。1980年代にアメリカの製造業の労働民衆を窮地に追い込んだ日本の生産性向上運動はアメリカ仕込みだ。残念ながらこれもアメリカの労働民衆は知らない。この場合知らないは悲劇だ。このブーメランの様な労働民衆の経験共有を考えると、耳タコの話にはなるが、やはり一国史を越えた空間史、例えば労働民衆の太平洋運動史といった枠組みを考えたい。

と書いた後、巻末の文献にR. O. ボイヤー、H. M. モレーズ、雪山慶正訳『アメリカ労働運動の歴史 I II』(岩波書店、1958、59)を見つけ驚いた。この原著はRichard O. Boyer and Herbert M. Morais, *Labor's Untold Story*, New

York: United Electrical Workers of America, 1955。発行のUEはニューディール時代電機産業の組合として60万以上を組織、最多の女性組合員を抱えたCIOの有力組合だったが、戦後共産主義者の組合としてCIOから除名。発行当初筆者の一人も共産主義者の疑いで議会に呼ばれた。これが為かアイビー・リーグを含め全米の名だたる大学図書館でも時にこの初版(70年代等その後再販)が見当たらない。ところが日本では翻訳が、当時岩波新書でベストセラーとなっていたレオ・ヒューバーマンの米労働民衆史『アメリカ人民の歴史』や『資本主義経済の歩み』を訳した雪山氏の訳で岩波から出る。当時はまるで米国左翼が日本に避難して来た様だった。そして筆者も又前述した労働運動のメッカで、これらの本をその内容をリアルに吸収出来る雰囲気の中で原書乃至訳書のどちらかを手にしたのではないか。そして最近久しぶりに黒人史のドキュメンタリーで有名な作家Philip Drayが、米国の労働運動の叙事史*There Is A Power In A Union: The Epic Story of Labor in America*, New York, London, Toronto, Sidney, Auckland: Doubledayを、本書の発行と踵を接する様に出した。本書同様、学生のみならず多くの働く一般読者に労働運動の大切さを伝え、自分達と同じ境遇にあった人々が築いた運動の未来を読者に託した内容だ。そしてこの本の各所に*Labor's Untold Story*の叙述が引用されている。こういう労働民衆史教育にピッタリだが、日米両国で忘れられたていた本だ。既に本書自体時代を跨ぐ壮大なトランス・パシフィックの運動空間だった。

(野村達朗著『アメリカ労働民衆の歴史一働く人びとの物語一』ミネルヴァ書房、2013年3月、vii+339+23頁、3,500円+税)

(しのだ・とおる 早稲田大学社会科学総合学術院教授)